

オリ主ジオウの逆転ヒロアカ

無個性のソーイお茶書き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

祝え！仮面ライダージオウの力を受け継ぎ、時空を超え過去と未来を知ろしめす時の王者。その名も仮野面太！まさに、生誕（再誕）の瞬間である！

以前書いていたデータが諸事情により飛んでしまったため、同じ境遇の人（友人）と合併して再投稿です。

目次

プロローグ	1
それ本当に俺？	10
閑話電子とゲイツの楽しい話し合い。	
20	
半熱半冷の騎士	26
俺の：私のオリジン【前半】	34
俺の：私のオリジン【後半】	41
私の強くてニューゲーム。俺の決意の コ	
ンティニュー。	53

プロローグ

「変身！」

「ライダータイム」

「カメーンライダー！ ジオーウ！」

「…………… ジオウの力を持ってヒロアカのヒーローとして転生したっ！……………のはいいんだけれど……」

「む！くつ殺せと言わせたいヒーローNo. 1の仮面ライダージオウじゃねえーか！」

「マジかよヤラせて！」

「鎧の上からでもイカせてやるよお！」

「あたしらの超絶テクニクをお見舞いしてやるぜ！」

「……………誰があんたらなんかとするかっ！」

「ジカンギレード！ ジュウ！」

「フィニッシュタイム！」

【ビルド！】

【スレスレシューティング！】

ポケモンのロケット団の様な服装のヴィラン達をビルドの白線みたいなあれで挟み、ジカンギレードの引き金を引いた。

すると銃口からデカイ光弾が発射されヴィラン達に激突。

「「おあん！」」

妙な断末魔（使い方あつてるか？）をあげてヴィラン達は気絶した。

その瞬間、ワッ！と歓声が響き渡る。

「さいつこうだね！ジオウ様！」

「変身前と変身後で印象が変わるのもギャップがあつていいし！」

「ハア…ハア…！今日も、とつても凛々しいわ！」

「ああ揉みたいなあ…あのこか…」

「言わせないわ芦戸ちゃん。…気持ちはとつても分かるケロね」

「流石は、我が魔王！」

「ジオウの人氣は凄いな。ファンクラブが何個も立ち上がっているし個性もすごい。今じゃ見られなくなった特撮の平成ライダーの力をアーマーとして被ることができる。

その事によって様々な災害場所に適応できるしなによりアーマーを被る前から強い。どんな鍛え方をしているんだろう。そういったところは全くメディアに見せてないし秘密の訓練場でもあるのかな。そして何より後天的に個性が発現された世界でもかなり貴重な人でもある……。流石すぎる……！オールマイトと肩を並べても違和感がないつていうけど本当みたいだ。何か弱点はないのかな。あの強さはどこから……。〔ブツブツ……〕

うーん。ここまで来ればもう察しはつくよな？

そう。俺はどうやら、ヒロアカの貞操概念が逆転したところに転生してしまったのだ……！

あ、ヴィランとかも全員女で、ちらつと聞こえた限り、峰田の代わりに芦戸がオープンスケベになっているっぽい。

緑谷は全く変わってないみたいで安心だ。

……そして、最後に一番気になったのは……。

「誰だ我が魔王って言った奴！あとで事務所まで来いよ！今日にな！」

この世界の仮面ライダーはドライブで終わっている筈だから、我が魔王なんてセリフを今の奴らが知っているわけが無い。

なのに我が魔王なんて言ってる奴は絶対なんか知っている筈だ！必ず聞き出してやる！

★

「ひゅー♪ジオウつてば以外と大胆だったんですね〜！」

「茶化さないで下さい電子」

俺の事務所はとあるビル之最上階となっていて、出勤の際は屋上に行きフォーゼアーマーで空を飛んで行く次第になっている。

今回の事件はたまたまその場に居合わせただけだったけどな。

……さて、そろそろこの女について説明しよう。

『五代譜子^{ごだいふおんこ}。』

ヒーロー名電子。個性：テレフォン』

『どこでどんな状況だろうと電話できる個性。主に連絡要員だぜ！』

と、ここまでが公式に発表されている資料。

ここからは個人的に見て判断したものだが……。

・見た目は茶髪のロングにデカイ耳が特徴。

・男への性欲より恋愛の方が上回っている。

・ものっそいウザい。

・原作の芦戸以上に恋愛脳。

・毎晩のオカズはBとLの薄い本（本人談）

・これでも他の女よりましである。

・相手を油断させた上で叩き潰す戦闘方法

ということ。

いろんな意味で腐った奴である。

……ん？まてよ。ここが貞操逆転世界ならBのLは俺たちの世界にとってはGのLってとになるわけで…。

…いや、考えるのはやめとこう。

「だあーつてえ。あんな公衆の面前で『俺の所に来い！』だなんて…！どんなイケメン男子ですかあーもおー！女顔負けですね！」

「誤解の生まれる言い分はよしてもらいましょか電子？」

「はいいい！すみませんでしたああああ！どうぞお踏み下さああああい！」

「どさくさに紛れて自分の性癖を押し付けるな！お、おい足に縋り付くんじやない！」

「うへへ…。ジオウのおみ足…。私だけのとつけええん」

「キヤラ崩れてんぞ！」

絡みつくな足を舐めるな！オラっどけっ！

俺は電子を右足で押しつけた。

「ありがとうございませううううう!!!」

電子は麗らかな笑顔を浮かべている。

……もう嫌だあ。元の世界に帰りてえよお…。

”コンコン”

ナイスタイミング！いい所に助けが来た！

電子は外面はものっせい取り繕うから誰かが来たら必ず真面目フェイズに移行するし有能に変化する。

「どうぞ」

俺は入室の許可を出して、訪ねてきたのが誰なのかを心待ちにした。

とにかくお礼を言いたいな

「貴方がジオウね！50年後の未来で男を全滅させ自分のハーレムを築いた最悪の魔王！お陰で未来の私達は飢えに飢えて……。兎に角！ここで倒させてもらおうわ！」

【ゲイツ！】

「前言撤回！ものつそい面倒な奴が来た！」

「変身！」

【ライダータイム！】

【カメンライダーゲイツ！】

【oh NO！】

てか、何故ゲイツの力を!?

「さあ！その首貰った！」

と、とにかく応戦を……！

「お待ちくださいお客様？お紅茶を入れましたわ」

「え？あ、ありがとう？」

電子から突如渡されたカップに驚き思わず受け取るゲイツ。：あー何となく察しがついたわ。

(……えつと、電子？……程々に、ね?)

が、そんな俺の思いも虚しく、電子は素早くゲイツライドウオツチを時空ドライバーから抜き取り変身を解除させ、生身になったところを狙って一本背負いで床に叩きつけた。

…戦闘訓練でもおんなじことやられた身としては、複雑な気分だが、早々に敵を排除できて良かった…のか？

「ジオウどうしますか？この自分の世界に浸りすぎて帰ってこれない可哀想な子」

「も、妄想じゃないもん！本当に未来から来たんだもん！」

「はっ！甘ったれんな！そんなに捕まってDMプレイがしたいのか！このど変態め！」

「っ!!?!ちがうわや！」

「動揺しすぎて頭がおかしくなりおつたな。さて、この女、どうしますか？……はっ、まさか本当に調教を……？」

「ちげーよ。いい加減脳内ピンクを直せ」

「女である限り無理です！」

「即答するなよ……」

「あと、するならあたしも混ぜてください！」

「本当にやめてくれ……」

これでまだ周りよりマシなんだぜ？

信じられるか？

…まあ、それは置いておくとして、このさつきから俺の股間をチラチラ見ているむつつりに話を聞くとしよう。

あ、そうそう、言い忘れてたが。

これは俺がジオウの力使いながら変態から逃げまくり、最善の魔王を目指す物語だ。

それ本当に俺？

「最初はヒーローたちが大勢で倒しにかかったんだけど、全て振り返りにされちゃって。世界中から資源集めまくって国ごと消し去ろうとしてもミサイルを別次元に送っちゃって……もう未来の私たちには過去を改変するしか方法がないのよ！」

「ほう。でも今は関係ないね証拠もないし警察に突き出しましょう」

「落ち着いてください電子……」

まだゲイツは縛り上げたままだが、一応話が普通に出来るまで2人は落ち着いた……
筈。

それにしても、未来の俺すげーな。ヒーローを殆ど振り返りにするなんて。

いや、レジエンドライダーの力のお陰だろうけども。ミサイルのくだりとか、ヘルヘイムに送ったんだろうし。

…そういえば、この世界の仮面ライダーはドライブまでだったが未来のライドウォッチはどうなっているんだ？

そこんとこ聞いところ。

「一つ聞くんが、未来で認識されている仮面ライダーはなんだ？」

「……奴が持っていた力は『クウガ』『アギト』『龍騎』『ファイズ』『ブレイド』『響鬼』『カブト』『電王』『キバ』『ダブル』『オーズ』『フォーゼ』『ウィザード』『鎧武』『ドライブ』だ」

「あつ、多分そいつ俺じゃないな」

「はっ!？」

いやだつてさ、俺、すでに『ビルド』とか『エグゼイド』のライドウォッチ持っていて、ビルドに関しては今もう使っているんだよな。

それに、かなり使い勝手がいいし、この先もバンバン使うつもりだから、未来の俺が使わないわけがない。

つまり俺は、最悪の魔王にはならない!

QED!

……と、いうことを懇切丁寧に説明してやったら、みるみる顔を真っ赤にして土下座して謝ってきた。

「すみませんでしたっ!能力が似ているとはいえ、全くの別人を襲ってしまっなんて!許してくださいなんでもしますから!」

ん?今なんでもって……。

「ん?今なんでもって言ったね。なら私と来てもらおうか」

「へ？いやつ、ちよつと引つ張らないでください……えつ、どこ連れてくんですか!？」

お、おーい電子さん？ゲイツの襟首掴んでどこ行くんですかー？

「じゃねジオウ。この子の罪は私が与えますから」

「あつ（察し）…助けて仮面ライダー!」

”バダン”

”……………アーツ!”

「oh……」

【悲報】ゲイツ、女として色々と大事なものを失う。そして電子は両方ともイけることが判明。

「まともなのは俺だけか」

この世界でまともな女子がまた一人失われた瞬間である。世界は残酷だ。

”プルルルル、プルルルル”

ん、フロントから電話？

”ガチャツ”

「はいこちら仮面ライダー事務所」

《ジオウさんですね？虹色の服を着た女性が『我が魔王に…ジオウに会いに来た』とかほざいていますけどどうしますか？》

お、来たな？虹色とか派手だねえ。

…で、今日のシフトは砂糖知能さんか。

暴言的な発言をするなどは言わないけど公私の区別くらいはつけて欲しい。

「仕事なんですから汚い言葉を控えましょうよ。…あーそれと、その人は俺が呼んだんです。通してやってください」

《わかりました…あ、なんかもう一人来ましたよ》

「え、もう一人？特徴は？」

はて、今日は何か予定入ってたっけか？

《髪の毛が真ん中で紅白色に分けられた女性のガキンチョっすね》

あーね？あいつか。OK理解したよ。

「だから言葉使いを…あーもういいや。先に虹の人が終わってから対応するから待たせておいてくれ」

《了解》

”ガチャン…”

…さて、待つか。

★数分後だぜイエア！

「待たせたな！ドアから勢いよく私が来た！」

”ドバァン！”と勢いよくドアが開かれる。

初っ端からのセリフに面食らったが、それ以上に俺は彼女の顔を見て驚いた。
なぜって？

「……んでここにいんだよ女神様ア！」

——
「そいつが俺を転生させた女神だったからだよ！」

「なんでだよ！あんた自分でこの世界は干渉しないとか言ってたのに！」

「えへへ…来ちゃった」

「そんな軽いノリで片付けられるかっ!?あんた世界のバランス云々でこっちに来れないんじゃないのかよ！」

「さっき砂糖さんに注意したこともすっぽりと頭から抜け落ちてふざけた事を抜かし
ているアマに叫んだ。」

「キャラ変わったねー。まあ、女神ちゃん権力あるし?そこんとこをあーだこーだして
何とかやって来た！」

「何の為にだよ！世界が崩壊するとかほざいてた癖に！」

「ふ、愛の力に出来ないことなど無いのだ！」

「こんの腐れ恋愛愛神がああああああつ！」

「いだだだだだ！あ、アイアンクローはやめてえ！ナイツスウ！」

「脳みそまで汚れてんな！このドMがあああ！」

「ハアンツ！」

…その後、2人してしばらく暴れ、互いに話ができるどこまでは平常運転に切り替えた。

まあ、仮にもお客様な訳だから、珈琲2人前を淹れて片方を女神様に差し出し、自分のは角砂糖を2つほどいれフーフーしながら飲む。

「…で、本当は何の目的でここに来たんですか？」

女神様も珈琲を飲んで真剣な顔つきになった。

そして、口を開けて

「君に会いに来たのさ」

「よっしアイアンクローの時間だAre You Ready？」

「出来てるよ……！」

「オラアアアアアアアアアアアアアア！」

「いやあああああああん！キモティイイイイ！」

……どうやらマジでこれだけだったらしく、お肌ツヤツヤにして帰って行きやがっ

た。

「はあ……。まったく片付けもしないで出て行きやがって」

物が散乱とした部屋を掃除して、もう1人のお客さんのため色々整えた。

”プルルルル、プルルルル”

《はい。こちらフロント》

「紅白饅頭女子を通してくれ」

《わかりやした。……とところで、先程内股になりながら恍惚とした表情で出て行った虹

色の人と何かあつたんですか?》

「お灸を添えた。ただそれだけだ」

《……………了解》

「おいなんだ今のは」

”ガチャン……”

「しかも切りやがった……」

フロントにも連絡して、例の彼女をこちらへと呼びたした。……ちよつと腑に落ちないが。

……数分後、”コンコン”と控えめなノックかドアから伝わる。

「どうぞで」

「失礼します」

ゆつくりとドアから入って来たのは、原作と殆ど変わらないヒーローコシユチューム（少し伸縮性を持たせた）を身に纏った紅白饅頭こと…。

「力試しさせてくれ師匠…！俺が今、どこまでやれるのかを！」

女体化した轟焦凍！またの名を

『タドルクエスト』

「レベル2…！変身！」

『ガツシャットガツチャーン！レベルアップ！』

『タドル巡るタドル巡るタドルクエスト〜！』

「頼むぜ師匠…！！」

仮面ライダーブレイブ！

閑話電子とゲイツの楽しい話し合い。

〔side 電子〕

ジオウと別れた私は、ゲイツとやらを別室に連れて行き、ちよつとしたお話し合いをしています。

「あつ……がつ、ギィ……!」

「うーん中々タフネスですなぁ……」

私が個性を使って、脳に性的快楽の電波を送って隠していると思われることを聞き出そうとしても、中々口を割りません。

「もうイク寸前で止められるの29回目ですけど……吐いちゃった方がいいんじゃないですかねえ? そしたららひと思いにやっちゃいますから」

私はゲイツを懐柔しにかかります。

一番最初に凄まじい快楽結を与えた事で、体はそれを求めて仕方がないはずなのです。

「……へ、へ……。誰が話すかよ………つ!」

「あそ、ならもつと追い詰めるだけですから」

「これで30回目………つと。」

これは長期戦を覚悟しておいた方がいいですね。
未来から来たならその手段は？

何でジオウと同じベルトを持っている？

何故未来のジオウはハーレムを築いたのか？

聞きたいことは山ほどありますから、気合いを入れてやりますか。

「絶対に屈するもんか……！」

★

「もうらめえー！」

知りたいことは大体聞けた。……けどゲイツはアヘリ顔を晒しながらおねだりをして
いる。

……流石の私もここまでの行為を言葉に記すのはちよつと憚れるから控えさせてもら
いましょう。

……さて、分かったことを纏めておきましょう。

Q この時代に来た手段は？

A 簡単に言えばタイムマシンで時間を超えてきた。

Q ジオウと同じベルトを持っているのは何故

A 気がついたら持つていた。恐らく『個性』だと思われる。

Q この時代に持つてきた物はある？

A 万能型タブレットは持つてきたがそれ以外は何も

Q 何故未来のジオウはハーレムを築こうとしたのか

A 己の欲望を満たす為

Q 未来のジオウの姿はどんな感じ

A 基本女を犯していて、頭に紫の変なものを乗っけている

Q 変なもの？

A ブドウみたいだった

Q ……ところで、その隠し持つている「エグゼイドライドウォッチ」は？

A ……隙があつたんでスツてきました。

……商売道具取られてんじゃないですよジオウ。

つてかそもそもジオウは男の癖に隙がありすぎるんです。ズボンのチャックが開いていたり、この前だつて机の棚が開きっぱなしでしたし、日記も置いてありました。

普通職場で書きませんよね？

しかも私の印象をメモしていましたし……。

- ・見た目は茶髪のロングにデカイ耳が特徴。
 - ・男への性欲より恋愛の方が上回っている。
 - ・ものっそいウザい。
 - ・原作の芦戸以上に恋愛脳。
 - ・毎晩のオカズはBとLの薄い本（本人談）
 - ・これでも他の女よりましである。
 - ・相手を油断させた上で叩き潰す戦闘方法。
- 何ですかこれ。

もう一度言います何ですかこれ！

原作ってなに!?

性欲より恋愛脳!?!んなわけないでしょう!

あの人に近づく女性なんて私とここの職員と開発部の発目明くらいですからちよつと偏ってますよ!常識が!…確かにここのメンツでは私の性欲は控えめですが…。

ここがおかしいだけで他の人たちはちよつとオープンなだけで行動には移さないへタレですよ!

……でも、他の女より良いってのは凄く（子宮が）キュンと来ちやった。

……べ、別に!ジオウを恋愛対象で見ているとか、そんなんじゃないんだから!せ、性

欲の対象でしかないから！

……と、我ながらツンデレヒロインみたいなことを考えていますと、

「おねえさまあ、はやくう！」

痺れを切らしたゲイツ（全身ビチョビチョ目がハート全裸）が私を押し倒してきました。

しかも、私の服を脱がそうとしてくるのです。

「ちよっ、ゲイツ止めなさい！」

私は慌てて止めさせようと声を荒げましたが、彼女は狂った笑みを浮かべて、言い放ったのです。

「ふっ、遠慮しなくてもいいんですよ。おねえさまが教えてくれたきもちいいことを、おねえさまにも感じて欲しいですから」

それを聞いた瞬間、私は悟りました。

（喰われる……！）

と……。

★
【side out】

その数秒後、『アーツ』という声が部屋から聞こえてきて、ドアを開けると、全裸の電子の上にもこちらも全裸のつやつやしている少女がのしかかっており、虚ろな目をして
いる電子が発見されたとかないとか。

…何にせよ、捕食者は明白であつた……………。

半熱半冷の騎士

【ステージ！セレクト！】

轟ブレイブのステージセレクトによって転移した場所は、テレビで見たことのある、馬鹿でつかいサツカー場。

俺と轟ブレイブはその中央で相對していた。

「変身してくれ、体育祭までには仕上げたい」

「んまあそれに関しちや良いんだけどさ……」

俺はジクウドライバーとジオウライドウオッチを取り出し、まずベルトの方を腰に巻いた。

【ジクウドライバー】

「俺はもうちよい君と話したかったが」

「ンブツ……くっ……流石にプロ。精神を揺すんに長けてんな……」

「別にそんなんじや……。まあいい」

ライドウオッチを回転させ、ライダーの顔を完成させた後に起動。

【ジツオウ……！】

そしてベルトにセットし、右手で叩くようにロックを解除。ライドウオッチが挿さっていない方を持ち、

「変身」

と眩き右に回した。変身音が流れる。

【仮面ライダー！ジツオウ……！】

【ジカンギレード！ケン！】

「行くぞ」

変身が完了した俺はジカンギレードをケン状態で召喚し、轟ブレイブに向かって突っ込んだ。

『ガシャコンソード！』

『コ・チーン！』

「……はあっ！」

それに対して轟ブレイブは、ガシャコンソードを呼び出し氷モードに。

剣先を地面につけ、俺の方向に切り上げた。

すると、原作体育祭にて見せたドームを覆い尽くせそうなレベルの氷を形成。俺を氷漬けにしようと迫って来た。

【タイムチャージ】

「フィニッシュタアアーム！」

〔5〕

回避は勿論普通の攻撃も対策にならない為、

〔4〕

迎撃には必殺技クラスの威力が必要だ。

〔3〕

俺はライドウオッチの必殺技発動スイッチを入れ、ベルトのロックを解除し回転させる。

〔2〕

そして助走の勢いそのままライダーキックを放った。

「タアアームブレイク！」

「オリヤアアアア！」

”バキーン！”

〔1〕

氷は粉々に砕け、轟ブレイブの姿を再び視認。

「クソッ。やっぱこれじゃ終わんねえか」

『カ・チーン！』

【ゼロタイム！】

そう言いながらソードを炎モードに変更し、左手に持ち替え、低い姿勢から突きの動作を行う。

「喰らえっ……！」

”ボオオオオオオオ！”

円形で氷と比べれば範囲も小さいが、速いし当たれば溶けそうな程の熱量を感じる。

【ギリギリ斬り！】

が、当たらなければどうということはない。

タイムチャージケンの特殊効果で少し反応が速くなった俺は、まさにギリギリのところで右斜め上の方向に避けた。

そして更に踏み込んで、上段から斬りかかる。

狙うは手首だ。

「上かつ！」

”ガキイン！”

「おっと防がれたか」

しかし轟ブレイブの防御が間に合っしまいソードを取り落とさせることは出来なかった。

まあ、それで終わりじゃないけどな。

俺はから空きの胴体に蹴りを放ち、ジカンギレードを「ジュウ」に変え3発ほど撃ち込む。

「がっ!？」

吹っ飛ばされた勢いでゴロゴロ転がっていたが、

『コ・チーン!』

「ぐっ、おあっ!」

片膝立ちまで体制を整えて自らの前に分厚い氷の壁を生成した。こっちから向こうが見えないようにワザと透明度を落とす工夫もしている。

『カ・チーン!』

”ジュオオオオオオツ!”

だが、防音までは完璧とは言えないな。

ま、こればっかりは仕方がない。ライダーの武器の宿命だ。

(さて、何かを焼いた音が聞こえたが…どうくるんだ?)

てつきり『透明化』のエナジーアイテムで奇襲してくると思ったが……。

とりあえずは何が来てもいいよう、ジカンギレードを構えておく。

氷の壁を壊そうかとも考えたが、何か畏があるかもしれない。

例えば、ワザと何かを燃やす音をさせて『何かを準備しているんじゃないか』と察した俺が、後手に回らないよう焦りながら氷を破壊する俺に不意打ち。……とかな。

それとも、ただ単に休憩しているのか。

「どちらにせよ、この壁は壊しとこう」

【タイムチャージ】

轟ブレイブの行動が後者だった場合は体力が戻らないうちに戦闘に持つて行かないやだし。

【5、4】

前者だった場合は……まあ、臨機応変に対応しよう。

【3、2、1】

【ゼロタイム！】

【スレスレ撃ち！】

ジカンギレードの引き金トリガーを引くと、ピンクの弾丸が放射され、氷の壁に大きなヒビを入れていく。

だが、全壊には至らなかった。

「……なら、もう一度——！」

俺が再びタイムチャージのボタンを押そうとした瞬間。

”ボオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!”

世界が紅に染まった。

「ドアツチイイイイイイイイ!?」

俺はあまりの熱さと、体に纏わり付いた炎を消そうと地面に体を擦る。

なんかもうビククリし過ぎて一周回って冷静になったのか、気が狂ったのかは分からんけど、何となく状況は理解した。

恐らく轟ブレイブは地面からあの炎の攻撃、しかも、威力を見る限り必殺技を使って攻撃してきたんだ。

多分、最初の何かが焼ける音の正体は地面。

地面に向けて炎の突き技を放って穴を開け、大体俺がいる位置まで地中を移動。

そしてその位置で『タドルクリティカルフィニッシュ!』を発動させ俺を攻撃…。

(かんっぜんにやられたな…)

一杯食わされた。

エナジーアイテムの存在ばかり頭が行って、ここまで考えつかなかった。

いやそもそも、エナジーアイテムに頭が行ってなくても思いつかなかっただろうな。

ヒーロー科とは言え学生が、一応プロの俺にここまでダメージ与え、発想でもこちらの上をいった。これはもうあいつの勝ちだな…。

「轟ー。聞こえるか？【降参】！俺の負けだ！」

俺は地面に大の字で寝転がりながら声高らかに、叫んだのであった。

俺の…私のオリジン【前半】

「轟ー。聞こえるか？【降参】！俺の負けだ！」

俺が焼き開けた穴の奥からジオウの声が聞こえてきた。それを聞いた俺は……いや、私は。

「……やた……やった！やったあああああ！」

小さな声で叫ぶという我ながら器用な事をやりつつ小躍りしていた。なにせ、どうやったら勝てるかをずっと考えてできてやっとなったのだから。

もちろん、実力がプロに届いたってことの嬉しさもあるが、それ以上に喜ばしい事が私にはあるのだ。

★

それは、約10年ほど前の話。

私の個性が【半熱半冷】と判明した時のことだ。

その時の私は自分の力を試したくてウズウズしていた。だから、親父に頼んで個性を

使うことができる施設に連れて行ってもらって、実際に使ってみた。

左の、炎を。

その次の瞬間にはその部屋は大火災と化していた。

「……………?!?」

「これは……っ！とんでもない力だなあつ、焦凍！だがやり過ぎだ！」

所々溶けている場所があったのを覚えている。

恐らく、マグマも形成したんだと後で察した。

これには流石の親父も慌てて私を助けに来たが、当時の私はそれに気付かず、右の水を使って消化しようとした。

そしたら今度は大爆発が起きた。

その部屋丸々無くなったのだ。

所謂、水蒸気爆発とやらが発生したのでろう。

……ただ、不幸中の幸いと言うべきか、そこは親父が個人的に管理していた場所であり、

人がいなかった。

が、その代わりに親父が全治何ヶ月単位の怪我を負ったのだ。

……私を、爆発から庇ったせいで。

この事は、親父が事実を捻じ曲げ、ヴィランにやられたとマスコミに報道させられる。
4、5歳の娘の個性暴発によって大怪我なんて報道されたら親子共々今後の人生が狂
いかねないし、色んな所から狙われるだろう。

その辺はしつかりと考えているあたり流石だなんて思った。

……そりゃあ、当時の私からしたらシヨッキングな話だったさ。

しばらく家に引きこもって、誰とも会わない生活を送ったし、飯も喉を通らない。

唯一暖かくない蕎麦は食べれたけどな。

……で、お姉ちゃんが

「焦凍……お姉ちゃんと一緒にお外で遊ぼ……？」

私を気分転換に外へ連れ出してくれた。

最初は渋った私だったけど、お姉ちゃんに真顔で、

「太っちゃおうよ？」

こんな恐ろしいことを言われたら出かけるしかないだろう。

……話が逸れたが、ともかく出かけたわけだ。

近場の公園や、ゲームセンター。オモチャ屋。

コンビニやスーパーでアイスを買って2人で食べたこともあったなあ……。

オモチャのアクセサリーも買って貰ったし。

いや『太る』って言われて外に出たのにアイスを食べるなんて矛盾しているが。

……まあ、そうやって出掛けている内に、少しずつ元気が出てきたんだ。お姉ちゃんには本当に感謝している。

…そして、何日か経って、また公園に行った。

お姉ちゃんも学校の用事があるらしく、今日は黙って一人で外出してみたんだ。

そしたら……。

《ガアガアッ!》

「いやっ!? こないでっ! 危ないよう!」

私の光るアクセサリーに反応したのか、カラスに襲われた。…けど、そのカラスは普通のやつじゃなかった。

「なんでこんなにおっきいのおお?!」

実に2メートル以上のでっかいカラス。

動物にも個性が宿ると聞いた事はあったけど、実際に見るのは初めてだった。…初めて見たのが襲われる時なんて、私もついてない。

だけど、今から見たらそれはとんでもない幸運だった。…何故かって？

【仮面ライダー！ジツオウ…！】

「待たせたな！」

《ガアツ!?》

——颯爽とカラスに飛び蹴りをかましながら登場した、私のヒーローと出会えたから。

「大丈夫か、小さなお嬢さん」

「ひゃ、ひゃい！」

ビックリと男と思われる人と出会ってめちゃくちゃ緊張したのを覚えているが、こちらを振り向かず、敵に集中する師匠。

それもそのはず。

《ガアアアアアアア！》

「うわっタフネスだな！」

まだカラスは死んでいなかったから。

しかも、地上じゃ分が悪いと悟ったのか、強烈な風を起こして空に飛び立ち、こちらに隙がないかを伺っている。

不安になった私は師匠に話しかけた。

「ど、どうするの？カラスさん、お空に……」

「ん、心配すんなよ。空中戦くらい、俺だつてできる！」

すると、師匠は白とオレンジの丸い何かを取り出して絵柄を、顔が揃うように合わせたのち、てっぺんのボタンを押して、ベルトにつけて回した。

「フォーゼ！」

「アーマータアーム！」

「3. 2. 1. フォーゼ〜！」

「すっごい！ロケットになちっちゃった！」

あまりにロケットロケットした見た目に当時の私は大興奮。舌を噛んで痛い思いをしつつも、師匠に憧れの視線を送る。

「まあ、安心して見てろ。すぐに終わらす」

ポオオオオオオ！という発射音と共にロケットと化した師匠がカラスに激突。

「宇宙に、行ってやるうううううう!!」

「行ってらっしゃああああああい！」

小さな手をブンブン振って師匠を見送る私。

引き込もっていたのはなんだったのかと思うほどのテンションの上がり方である。

…その数十秒後、遠い空で爆発が見えた。

…まあ、そこでトラウマスイッチが入った私はガタガタと震え出した。

爆発が、どうも苦手になっちまったらしい。

「ふう、お片づけ終了っ！……っ、大丈夫か小さなお嬢さん。ヤケに震えているが……」

師匠の、簡単な質問に対しても答えらなかつた。

「……何か、嫌な事でもあったのか？」

はいか、いいえで答えられる質問に気を使って変えてくれた師匠。とりあえず私は首を縦に振った。

「……俺でよければ相談に乗る。そのベンチで話そう」

そう言いながら変身を解いてベンチにどかっと座る師匠。……私は素直に隣にポスンと座って、ボソボソと話し始めた。

私の、苦悩を。

俺の：私のオリジン【後半】

「side 約10年前のジオウ」

なんやかんやあつて4、5歳の轟に出会った。しかもカラスに襲われるところを助けた形で。

それで、カラスを宇宙で始末した後話に話しかけたらブルブル震えだしたから話を聞くことにした。

……が、内容が想像以上に重かった。

まだ顔に火傷の後がないから、家族と喧嘩したとかそんな軽い感じだと思つてたのに。それにこれ、明らかに原作より強化されているよね？

性別聞いたら『女』って答えたし、男女違うだけでこうも変わるのか？

「お父さんも怪我しちゃつたし、こんな個性欲しくなかつたよお……」

……うーん、何とかしてあげたいな……。だってこのまま放つといたらヴィランに堕ちそうだし。

用はこの子の体に対して個性が強すぎるんだろ？

レベル1の村人にレベル100の勇者の力を与えたつてその力で自滅するだけだし。

ん？レベル……？

あ、そうだ。いい方法思いついた。……けど、あまり乗り気がしない。

だって、それは俺の力の一部を手放すことになるのだから。

でもこのまま放つといたら原作崩壊しそうなんだよなあ。……ま、なるようになるべ。

「……いい方法がある」

俺は、そう切り出した。



【side 今の轟】

「おじさんそれ本当!?!」

「おじつ……!?!?そ、そんなに老けて見えるのか……。まだ20代なのに……」

師匠は幼い私の言葉にひどく落ち込んだ様子で肩を落とした。

けれど、好奇心の塊だった私は率直に言った。

「教えて!わたし、なんでもするから!」

「ん?今なんでもって……」

「はい!なんでもです!」

後から考えると、ちよつとヤバイセリフである。

師匠は一つ咳払いをして気分を切り替えたのか、真剣な表情で、

「俺と契約して仮面ライダーブレイブになってよ」

と言つてきた。

「かめんらいだー?」

勿論当時の私が仮面ライダーを知るはずもなく、キョトン、と首を傾げる。

そんな私の様子を見て察したのか、仮面ライダーについて丁寧に分かりやすい説明をしてくれた。

「仮面ライダーは、昔のヒーローみたいなもので、皆の憧れだったんだ。そして、君にそのライダーの1人である『仮面ライダーブレイブ』になつてもらいたい」

「どんななの?」

「えーと、能力は炎と氷を操れる剣を持つて戦う、かな。…でも、肝心なのはそこじゃない。君は、「レベル」を知ってるか? ほら、ゲームとかの」

「なんとなくは分かるけど…」

『仮面ライダーブレイブ』にはその機能が採用されている。確か、最大レベルが150とかだったかな?…で、君の力もこれから成長していくに連れてそのくらいになると思う…いや、下手したらそれを超える。けど、君の場合は「個性の強さ」のスタートラ

インが既に50くらいに達しているんだ。こんな成長しきる前に君の体が壊れてしまう」

まだこんな幼い子供にするには難しい内容で、少しククララしつつも師匠に質問をする。

「え、ええと…、じゃあ、どうするの?」

「仮面ライダーブレイブにもレベル1や2は存在する。…もしかしたら、君の個性が仮面ライダーの力に引つ張られてレベルが君の体に合うレベルまで落ち着くかもしれない、つてことだ。ま、用はとにかく変身しろつてことだよ」

そう言いながら師匠は青と銀の丸い何かを取り出して、絵柄を揃えて私に差し出した。

「それは『ブレイブライドウオッチ』。俺が使えばアーマーになるが、持ち主が変わると、そのライダーの変身するためのアイテムに成りかわるらしい。…まだ俺も試してないが、やり方は知ってる。ただ、なりたい自分を思い浮かべて、そのボタンを押すだけさ」

「……」

私はその『ブレイブライドウオッチ』を手にとって、なりたい自分、とやらを考えてみた。

……頭の中に浮かぶのは、先程の師匠とカラスの戦闘の風景と、自分の個性で傷つけ

た父親の姿。

自分も、師匠のようにヒーローになって人を助けたい。その為に、自分の個性を制御して、誰も傷つけないようになりたい！

……私がこの結論に至るまで、そう時間はかからなかった。

覚悟を決めてボタンに親指を立てて、一呼吸置いて、ウオッチを起動させた。

「ブレイブ！」

”ズパアアアアン！”

「わっ!？」

「おわっ!？」

するとブレイブライドウオッチが鋭い光と共に妙な音を出した。

……やがて、視界がクリアになる。

……私の手にはブレイブライドウオッチが消え、代わりに派手な色をして、何かをセットできそうな穴が空いたアイテムと、その派手なアイテムの空白にセット出来るようなものが6個膝の上にはばら撒かれていた。

「……よし、じゃ、早速変身してみよっか」

「えっ……?？」

「俺がレクチャーするからさ、ね?」

師匠は私を立ち上がらせ、派手なアイテムを腰に押し付ける。

すると自動でベルトが巻かれてピツタリフィット。

……口頭で変身の仕方を教わり、私は『仮面ライダーブレイブ』として、初変身を迎えることになる。

『タドルクエスト！』

小さい方のアイテム：ガシャットと呼ぶ青いものの起動ボタンを押した後、顔の前まで移動させ、クルツとひっくり返し、決め台詞。

「変身！」

ひっくり返したまま派手なアイテム（ゲーマドライバー）にセットする。

『ガシャット！』

青い騎士のキャラクターをタップして、後はそのまま待機。

『レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャゲーム？』

『I, m仮面ライダー！』

変身音声が流れ終わり、全身に力がみなぎるのを感じると共に、個性が殆ど使えないことが直感的に分かった。

……でも、一つ文句を言うなら。

「ねえ……なんでこんなずんぐりむっくりなの？」

2頭身しかないから機敏に動けない。

当時の私は怒りすら感じていたと思う。

「ふぐっ………！」

「あ！今笑った！」

「いやー悪い悪い。そのレバーを引けば戦えるような体型になるからやってみ？」

ムスツとしながらも指示に従ってレバーを展開させる。

『ガツチャーン！レベルアップ！』

『タドル巡るタドル巡るタドルクエスト〜！』

「お、おとおお！」

その言葉に間違いはなく、普段の身長の何倍もの大きさになった自分にかなり興奮した覚えがある。

『ガシヤコンソード！』

「おとおおとおお！」

自動で剣も出てきてさらにテンションが上がる。

試しに左手で持つて個性を発動させたけど、軽く炎を纏うくらいでそれ以上はどんなに頑張っても炎は吹き出したりしなかった。

「………やた！やった！やったあああああ！」

すごい！本当に出ない！

もうテンションマックスで小躍りしてた。
エイサイハラマスコイ踊り

「お、おい……っ！その姿でそれはやめてくれっ！腹がよじれる……！」

「むっ！この踊りをバカにしたな！いくらおじさんでも許さないよ！」

昔のアニメでものすごく気に入っていたダンスだったからかなりカチンときた。因みに今でも踊れる。

「えいえい！怒った？」

「怒った！」

そこで更に小突いてくるもんだから、思わずチヨップしに掛かっちゃったんだけど、あっさり躲されて地面に激突してしまう。

「俺に勝とうなんざ10年早いわ！」

まあ、沸点の低かった私はその師匠の言葉に、こう返しちやっただ。

「じゃあ10年以内に勝てたら結婚して！」

「……はい？」

まあ、そこから壮絶な言い争いの末にそれを認めさせた訳だけど、今思い返してみ

も、自分の行動なのに訳が分からない。

……けど、結果オーライだった。

師匠を超えるため師匠に特訓してもらったり、疲れた時に互いに労いの言葉をかけた
り、一緒に街に繰り出して買い物をしたりする内に、その…あれだ。

惚れちゃった。

だから、私は今日……約束の10年が後1日で経ってしまうという日の為に全力を尽
くしてきた。

……そして、勝利した……！

ニヤニヤが止まらない！

師匠が、ジオウが、かりのめんた仮野面太が！

私だけの者となる！これでやっと1つになれる！

合法的に襲い掛かれる！

ありがとう幼い私ッ！

君はもう1人の私のヒーローだっ！

……あ、でも、もし浮気でもしたら……。

いやしないと信じているけど、もしやったら…。

私だけしか見れないよう。

私以外何も考えられないよう。

調教してあげなきゃね。

フフフ……。ああ、とても楽しみだ。

……あ、そうそう、私だけしか見れないってことは、師匠を独占できるってことだ。

まさに、私だけの特権。

調教した師匠の姿は私以外には絶対に見せない。

たとえばそれがどんな奴でも。

……そう、例えば。

こ
に
れ
も
を
ね
読
。
ん
で
い
る
君
ら

私の強くてニューゲーム。俺の決意のコンティニュー。

「……」

ゾツ、とする程に大きな意思がゆっくりとこちらに近づいてきやがる。

取り敢えず変身を解いて大の字で寝ていたところを起きて、警戒態勢を取る。

「師匠…お待たせ」

「別に待つていないが？」

歓迎もしていない。てか怖い。変身を解いていて、目にハイライトがない状態が一番怖い。

「なんで？ずっと待つてたでしょ…？10年間も…」

「俺は今を生きる男。そして何より知り合いの急な口調の変化が気になる男」

「嘘だ！」

うびやあ。(ビビりすぎて狂った)

なんでこんなに怒ってんのお!?(戻った)

「約束したでしょ……!師匠を10年以内に勝てたら結婚するって!そして今日がその締め切り日!私は見事に勝利したじゃない!」

わあこおりとほのおがたくさんでてるぞお。

行ってる場合か。

誤字ってる場合でもねえ。

……しかし、そんな約束してたっけか？

仮にしてたとしても、4、5歳の戯れ言だし。ってか轟が10年も前の約束に固執してる方に驚いた。

「あー。あのな轟、一体いつ俺がそんな約束をしたんだ？」

「9年と364日と20時間32分12秒前」

あの、質問に答えるたびこつちに一歩ずつ進んでくんのやめて？……あつ、そうだ！
「ワオ。やけに正確だな。……だが、仮に言っていたとしても証明するものがないだろ？」

証拠だしてみろやオラア！

流星に動揺しろやオラアン!?

……いや最低か。

完璧にアレじゃん。結婚をあやふやに誤魔化してるヘタレ男じゃん俺。

けど、流星に結婚なんて出来ないし。

俺30代後半なのに轟は15歳位なんだぜ？

犯罪の匂いしかないわ。

……で、そんな俺の問いかけに轟は、一瞬キョトンとしたものの、ニコツと笑って

「あるよ」

無慈悲にその言葉を放った。

「へ、へえ？ 本当かあ？」

顔には出さないが、内心冷や汗が止まんない状態だ。……また一歩踏み出して来る。

「正確には、『証明する人』だけどね」

「人？ いやいや、あの場に野次馬なんていなかったぞ？ それとも遠くから誰かが撮影でもしていたか？」

「ううん。そんなちやちなもんじやない、もつと大勢にだよ？」

……そしてまた一歩こちらに踏み出して……あれ？ 振り返った？

「なあ、そうだろ読者さん？」

「…………敗北者？」

「湧くなエース！戻れ！…………って、そうじゃない。いい？師匠。私達の、この会話を別次元から覗いている人がいるってことだよ。多分今も、どつちかの思考を見ていると思う…………!？」

ええ…？（困惑）

ちよつと何言ってるかわかんないっすね。

…と、前世の俺なら答えただろうが、今は違う。

なにせ、ここはヒロアカの世界であり、個性でなんでも出来ちゃう…つてのは言い過ぎだが、大概は何とでも出来る世の中なのだ。

もしかしたら、暇人プー太郎が個性を使って思考を読み取り、2チャンネルにて読み取ったものを書き込んでいるのかもしれない。

しかもそれは約10年前から行われていて、その時のログが残っている、と。

轟はそういうことを言いたかったのだろう。

…成る程しっくりくる。

何せ、自惚れる訳じゃないが、俺は約10年前から活動を始めてそこそこ活躍していたし、今日に至るまで殆ど負け無しだった。

当ても話題性はあったし、そういうのがあってもおかしくないかもしれない。

あとはどうやって覗きを辞めさせるか、だな。普通にネットを探して通報でいいか？

いやでも、10年間もよく俺たちにバレなかったな。うちの事務所エゴサーチしてるし、それにも反応しなかったってことだし。

だったら普通の解決方法は通用しないか。

…あれ？でも、轟はログが残っていると確信した上で俺に話を振っているんだよな？

だったら、その出所も轟が把握している筈！

クツソ有能だな俺の弟子！

「よし、言いたいことは大体わかった。今から戻って対策取るぞ」

「……………！……！……！……！……！……！……！」

「えっ!? ちよ、な、何で泣いてんの!?」

「え待って本当にわかんない。俺がただ一言『対策を取ろう』と話ただけで何でこうなる!?!」

「なんか失言でもしたか? してないよな!？」

「いや、もしかしてノリで『敗北者』と言ったのがマズかったか!」

「……………ごめんね……………ちよっと、感極まつちゃって……………ああああああ長かったああああああ……………!!」

「長かった……………?」

「え、待って、何が長かったの? もしかして俺の思考が? マジでか。」

「あの、轟? なんで泣いてんのか全くもって検討がつかないんだが……………俺、なんかやらなかったか?」

「取り敢えず聞いてみるしかない。」

「……………今の師匠はやらかしてない……………ただ、説明するとしよっと長くなるってか、ややこしいんだよね」

「……………なるべく簡潔に頼む」

「了解」

★

…簡潔にとிட்டたのに、結構話し込んでしまったが、纏めるとこんな感じか。

【剣と魔法のRPGライダーの力を得たことにより、セーブとロードとコンティニュー機能が使えるようになった。

しかし、セーブはリセットできない。

セーブポイントは体育祭前の俺との戦闘直後の「なあ、そうだろ読者さん？」のセリフ後。

この世界では俺と轟は、自分達を観察している邪神を認識していたそうだ。

本来の仮面ライダーブレイドにない機能が加わっているのは邪神が手を出したかららしい。

更には言えば邪神は、俺を都合のいいように傀儡人形にしてたらしい。

1週目は更生施設エンド

2週目はオーマジオウ（俺）殺害↓自殺エンド。

3週目はゲイツと共にオーマジオウ回避ルート。そして本物のジオウ（緑谷出久）と

共に最善最高の魔王へ。

……ここ、話聴いててガチでビビった。

出久君ジオウだったの!? つかアナザージオウみたいな俺がいるのにジオウとして存在できるのね……。

4週目

望んでもいないのにまた戻ってきた↓恐らく、今まで自分達を観察していた邪神の仕業だと感づく。それを引きずり下ろすための戦いが始まる。

5〜19週目（ここは流石に長すぎたからカット）

試行錯誤し、何とか自分達の土俵に引きずり下ろす。そして迎撃したところで世界が終わる。この時に邪神の死をセーブ。ロードしても蘇らせないようにした。

20週目↑イマココ

本来なら『なあ、そうだろ読者さん?』の後は強制的に戦闘になってしまうため、戦わない選択をしたことに、感極まって泣いてしまったらしい」

………壮大、だな。

ふざけているような感じもしないし、エイプリルフルでもない。

それに目の前の轟からは。15歳の少女ではなく歴戦の戦士、レジエンドライダーとしての風格みたいなのを見て取れる。

オールマイトも似たような雰囲気を感じていたので間違いない。

「ねえ、師匠…師匠はこれから何をしたい？」

「ん…？」

そんな轟が口を開き、疑問を投げかけてきた。

「師匠の前にはこれから先、沢山の障害が立ち塞がる。邪神がいなくなったことで新たな敵が出るかもしれないしね。今まではそれに強制的に立ち向かってたけど、今回は逃げて好きなこととして、誰にも縛られずに、自由に生きることまでできる…師匠は、これからの事に立ち向かうか、それとも逃げるか、どっちがいい？…ここは、これからの人生における、重要な分岐点だよ」

「……なんだ、そんなことか」

俺が、何のためにこの世界に来たと思ってる。

「俺はな、ずっと、人を助ける仮面ライダー^{ヒーロー}になりたかったんだよ」

高校生になっても、大好きだった作品の主人公たちのようになりたい。そう考えてたら、居眠り運転の車に轢かれて、あの世で神さまに出会って。転生して。

「けど、俺はそんな憧れには程遠い」

結果的に、棚ぼたで手に入れた力。

手に入れたばかりの頃は、その力に酔いしれて無責任な救済を行い、間接的に俺が殺してしまった…ということもあった。

その事件は、あの「オールフオーワン」も関わっていたため秘匿にされたが、それでも被害者家族の悲しみが晴れるわけじゃない。

「俺は、自分の選択で汚してしまった仮面ライダー^{ヒーロー}の責任を取る。二度とあんな事を起こさない為に。だから、ここで逃げるわけにはいかない」

俺は完全な善人にはなれないだろう。

オールマイトのようなを救済を行えない。

仮面ライダーの様なメンタルは持てない。

だが、理想を目指すことはできる。

「俺は！最善の魔王になって、障害も過去の自分も乗り越えて行く！そう、Plus U
I t r aだ!!」

最後はテンションに任せて何言ってるか自分でもわかんなくなつたが、改めて言わせてもらおう。

———これは俺がジオウの力使いながら変態から逃げまくり、最善の魔王を目指す物語だ。